

集落からみた古墳時代毛野の社会背景

友 廣 哲 也

- | | |
|-----------|--------------------|
| 1. はじめに | 6. 周溝墓からみた土器様相 |
| 2. 研究略史 | 7. 土器からみた井野川流域と荒砥地 |
| 3. 本稿での検討 | 8. 墓からみた井野川流域と荒砥地域 |
| 4. 荒砥地域 | 9. まとめ |
| 5. 甕 | 10. おわりに |

—— 論文要旨 ——

群馬県内では以前より古墳時代前期の土器様式はS字状口縁台付甕を甕の主体とする東海様式であるとされ、多くの東海地方からの人々が入植してきたと考えられてきた。しかし、県内の遺跡出土土器の構成を再検討すると、様々な複数外来地域からの土器が認められる。つまり東海地方から人が来たのではなく、当時の群馬県は弥生時代から古墳時代にかけて、東海地方、畿内地方、北陸地方等様々な地域の人々が行き交い、交流を持っていたことが分かってきた。その交流にあたっては遠隔地や周辺地域間をつなぐ交流網が存在していた可能性が高い。その交流網を駆使し群馬県の人々は様々な文化・物・情報を受容したと考えられる。さらに弥生時代の後期には様々な物・情報も伝播しており、外来土器や文物、情報の交流は古墳時代初頭期だけの現象ではない。つまり群馬県の人々は弥生時代から古墳時代にかけて東海地方だけではない汎列島内広い範囲で様々な地域の人々と交流を継続・維持している。

一方で土器の広い交流と並行し、周溝墓は群馬県内で弥生時代中期から確認されている。古墳時代になると方形区画の強い墓制へと展開した。古墳時代前期の方形周溝墓からも多数の外来土器が出土する。県内の方形周溝墓から出土する土器組成の検討から外来土器を取り上げ被葬者の出自を群馬県ではなく東海地方に想定する論もある。本稿では集落と墓との有機的な接点を想定し、集落生活者と墓群の被葬者の関連を想定し、墓の被葬者を隣接する集落に住んだ人であるという前提で検討した。目的は生活の場と死後の埋葬地との総合的判断のためである。結果は墓出土土器と集落の出土土器を比較検討した結果、被葬者の生前の生活の場を隣接する集落に求めることができた。考古学では墓に供献される土器は被葬者の出自をより強く示すとされてきた。本稿では墓の被葬者の特定も確認できたと考える。群馬県の古墳時代社会は共通する墓制を含め広い交流の中で様々な文化や物、情報を受容して成立した社会であったことが理解できた。

キーワード

対象時代 弥生～古墳時代

対象地域 群馬県

研究対象 交流・外来土器

1. はじめに

毛野の人々は3世紀後半になると今まで作り、使用していた樽式土器の製作使用をやめ土師器に変換する。この選択は汎列島的に古墳時代の成立という大変革の結果でもある。弥生土器が土師器へ変質したことは当時の毛野の人々の選択に他ならない。ただし、毛野の人々が樽式土器の製作・使用をやめ、土師器を選択したことは弥生時代中期から後期にかけて栗林式土器が樽式土器への変化や、古墳時代後期に甕が長胴化する現象とは異なる理由、要因があったと考えられる。栗林式土器から樽式土器の変化は文様要素・構成・施工工具等に前代からの系譜・伝統を持ち、文様変遷から段階的な移行を推察することを可能にしている。さらに毛野・信濃に分布した弥生時代中期栗林式土器は後期に至り、毛野では樽式土器、信濃では箱清水式土器の二つの形式を創出することになる。従ってそこには信濃と毛野の人々の土器選択の嗜好に地域性があったことが指摘できる。

古墳時代後期の甕の長胴化現象は竈仕様という機能性にあり、嗜好によるだけではない。

弥生時代の土器型式・文様の変化にに表れる地域性はやがて古墳時代になると汎列島的に無文土器である土師器に統一される。この変化の背景には広く一つの政治社会に統一されていく社会的な構造変質・背景を感じさせる。そして今まで地域性を維持した弥生土器が土師器に統一される。さて弥生時代から古墳時代にかけて遠い地域間で土器が交流、移動した事実がある。土器が移動した背景には人間の移動や文化・情報の交流の存在を認めることができる。つまり弥生時代から古墳時代への文化変質は広範な土器の交流を経て同じ土師器を作り使用するということである。したがって土器が交流した事実の裏には活発な人的な交流がある。そこには弥生土器が持っていた地域性はなくなり、古墳時代は汎列島的に同じ土師器の使用へ統一されたと考えることができる。

群馬県では1952年太田市内石田川河川改修工事に伴いS字状口縁台付甕を含む土師器が出土した(石田川遺跡報告書刊行 1968)。発見当初より土師器は外来の人が持ってきたもので、古墳時代は従来の在地の人間から発展した文化ではないとされ今日に至っている(発見時はS字状口縁台付甕が東海地域に出自を持つことはまだ分かっていなかった)。そして、弥生時代樽式土器を持つ人々は山麓に住み、土師器を持つ人々は平野部に入植し並立して存在したとされた。やがてS字状口縁台付甕が東海地方の土器であることがわかり群馬県南部の平野部に東海からの入植民がきたとされた。近年は東海からの入植民は最初に高崎市井野川流域に入植し、井野川流域は一気に東海の土器様式に変換した。その後東海様式は周辺に波及した。これが現在群馬県内にある入植民説である(入植、入植地という用語は非常に政治的な背景を

持つ用語である、事実入植民説には政治的な背景をもつと考察しているものもある。もし入植民説が成立するとすれば背後にある政治権力(国家?)の存在に言及する必要がある)。

しかし、弥生時代終末から古墳時代前期の毛野では東海の土器や畿内、北陸等様々な地域のいわゆる外来土器が出土している。外来土器の出土は同時に並行して長野県や南関東でも広く確認されている。じつは石田川遺跡にも東海系をはじめ複数他地域の土器が混在している。高崎市井野川流域でも同様に東海地方を含めた複数他地域からの外来土器が混在して出土し、毛野の交流対象は対東海の関係だけではない事がわかる(なお、本稿では現在の群馬県地域を毛野と呼ぶ)。

2. 研究略史

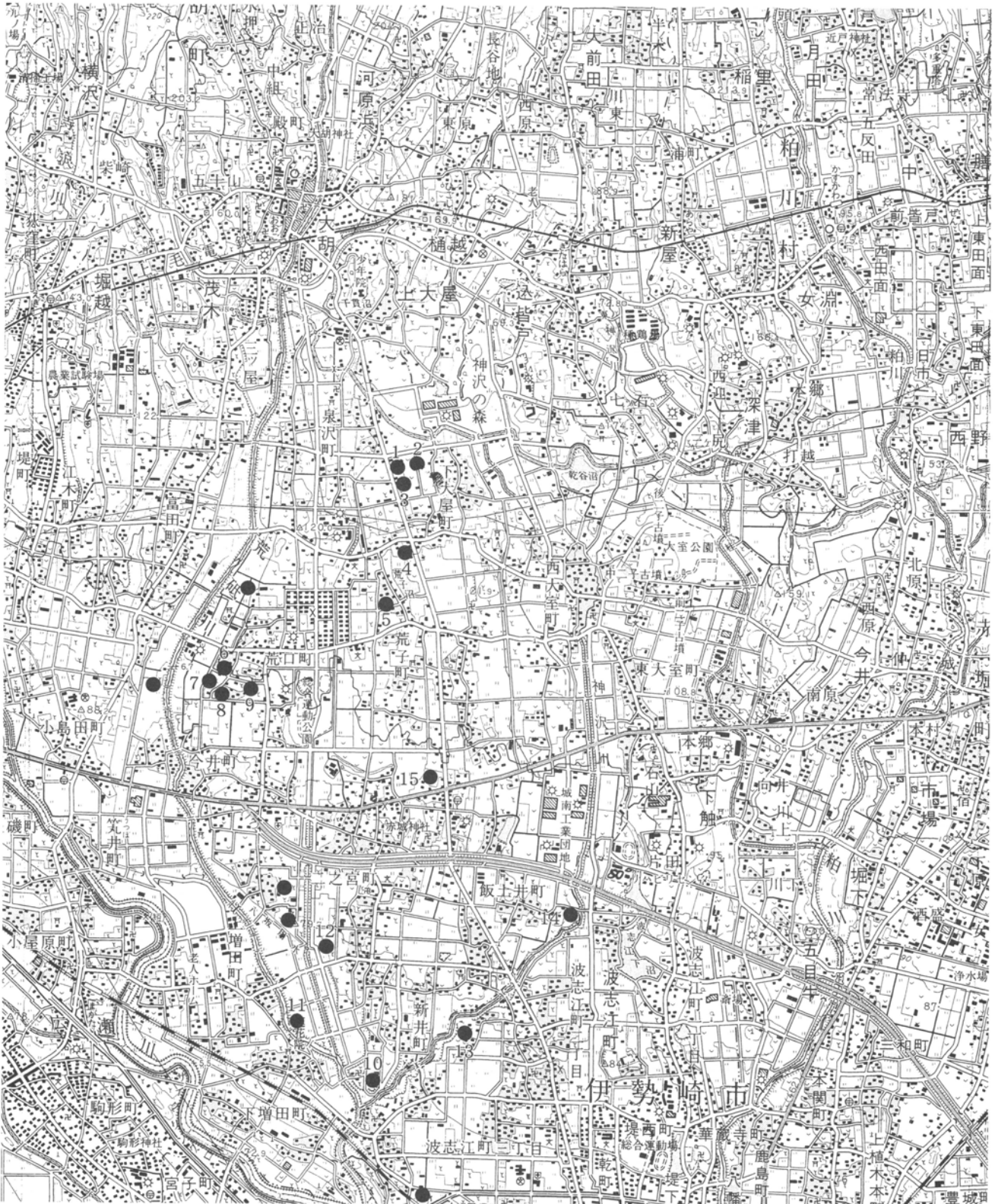
外来土器の研究は多くの先学の業績がある。石田川遺跡の調査を担当した松島栄治氏は当初より外来の入植集団を想定した石田川式土器様式を提唱された(松島 1968)。梅澤重昭氏は石田川式土器Ⅰ・Ⅱ分類案を提示した(梅澤 1978)。田口一郎氏はS字状口縁台付甕の編年組列案を提示し、群馬県内での指標となっている(田口 1971)。若狭徹氏は外来土器の模倣度に注目し時間的、空間的な分類案を示した。(若狭 1990・2000) 深澤敦仁氏は樽様式の崩壊とS字状口縁台付甕出現の問題から編年案を示した(深澤 1998)。大木紳一郎氏は弥生土器の編年案を提示した一連の研究を母胎にS字状口縁台付甕の技法的観点から専業生産品との見解を示した(大木 2001)。

小泉範明氏、井上昌美氏、飯島義雄氏は石田川遺跡出土土器の再検証をおこない新たな分析検討をおこなっている(小泉・井上・飯島 1998・1999・2000)。

小島敦子氏は土器の変質とともに墓域の検討から集落論を展開した(小島 1990)。周溝墓の展開から古墳社会の成立に迫った論考は梅澤氏も上げられる(梅澤 1994)。

これら一連の研究は弥生時代から古墳時代への大きな社会変質を土器・墓制から解明しようというものである。

一方入植民説は松島氏が提唱されて以来梅澤氏は新たな開拓集団、田口氏は東海に母集団を持つ集団移動民、橋本博文氏と梅澤氏は政治的背景を持つ入植民集団の存在を提示した(梅澤・橋本 1981)。若狭徹氏は最初に井野川流域に東海地方から入植し、その後在地の集団の再編がおこなわれ、さらに周辺に拡散定着するとの考えを示した(若狭 1990)。大木紳一郎氏はS字状口縁台付甕が専業集団の専業生産品であるとの見解から『換言すれば、土器づくりの技術体系そのものが移入されたのであり、そこには在地弥生土器の技術伝統は微塵もみられない。このことから当地でのS字状口縁台付甕の誕生には在地の集団は何ら関わりを持たなかったといっても過言では



- | | | | | | |
|-------------|-------------|------------|------------|-----------|----------|
| 1 東原B遺跡 | 2 中山A遺跡 | 3 村主遺跡 | 4 堤東遺跡 | 5 頭無遺跡 | 6 荒砥荒口遺跡 |
| 7 荒砥北原遺跡 | 8・9 荒砥三木堂遺跡 | 10 荒砥前原遺跡 | 11 下増田越渡遺跡 | 12 荒砥島原遺跡 | |
| 13 波志江中野面遺跡 | 14 荒砥二之堰遺跡 | 15 荒砥上ノ坊遺跡 | | | |

図1 荒砥地域遺跡分布図 (1/50,000「前橋」)

ないだろう』としている（大木 2001）。

一方高橋浩二氏は文化の交流の結果、一時的な人の移動はあっても集団的な入植や移住とは言い切れないとの立場を示し、同じ立場から北陸の古墳出現期の社会構造を解明した（高橋 1997・1999）。筆者も高橋氏と同様な立場にあり、内容は前稿で示した（友廣 2003）。

3. 本稿での検討

筆者は前稿（友廣 2003）で新保遺跡を中心にした井野川流域集落遺跡出土土器を検討した。略述すると群馬県内で農耕の開始が認められる遺跡は弥生時代中期に比定される。そして遺跡群が持つ共通の特徴は遠隔地の土器が出土することにある。出土する土器は南東北地方の南御山2式、北関東地方の御新田式、埼玉の池上式等が初期農耕遺跡から出土している。筆者はこの現象を弥生時代中期に農耕技術や情報の交流があった結果と考えた。高崎市内平野部の微高地上に所在する新保遺跡では農具、卜骨用の骨、装身具、鉄剣の柄頭等の製造・貯蔵・供給の拠点集落である事から農作業・食料生産にきゅうきゅうとした社会とは異なることが理解でき、さらに渋川市有馬遺跡では中国産の鉄の存在を認めた。有馬遺跡出土鉄剣は登呂遺跡と強い共通性をもつ柄頭を装着しており当時はすでに広い文物の交流網だけでない生活様式を含む情報網を持っていたことを認めた。当時の人々が

樽式土器から土師器導入を選択し、製作するにあたりその交流網は最大限利用されたと考えた。土師器の導入も東海地方からの様式的な導入ではなく、各器種を東海・北陸・畿内等の複数地域から取り込んでいた。つまり井野川流域は弥生時代中期から継続した社会が存在し、その社会は遠隔地、周辺地域との流通網や交流網を整備した社会であった。そして土師器の導入にあたっては遠隔地間の交流網が稼働し新しい生活体系を形成したと判断した。毛野ではS字状口縁台付甕は甕の主要機種の一つではあるがS字状口縁台付甕が主体の東海様式の土器組成にはならないことも理解できた。

さて前稿では社会の変質に伴う土器・物の交流を土器の検出実体を概観・検討した。ここではさらに前稿の結果が県内の他地域と同様な様相を示すのか、あるいは異なった結果を示すのかを検証したい。本稿では群馬県前橋市を中心に県中央部の集落と周溝墓出土土器を井野川流域と比較検討したい。また前稿同様外来土器・外来系土器との呼称は便宜的に非在地土器全てを指し、様式とは複数器種のセットを持って様式としたい（友廣 2003）。

4. 荒砥地域

本稿で使用する荒砥地域とは現在の前橋市東部・大胡町・粕川村・赤堀町・伊勢崎市北西部を含む大間々扇状地の南西の一部を指す、したがって特に前橋市荒砥地域

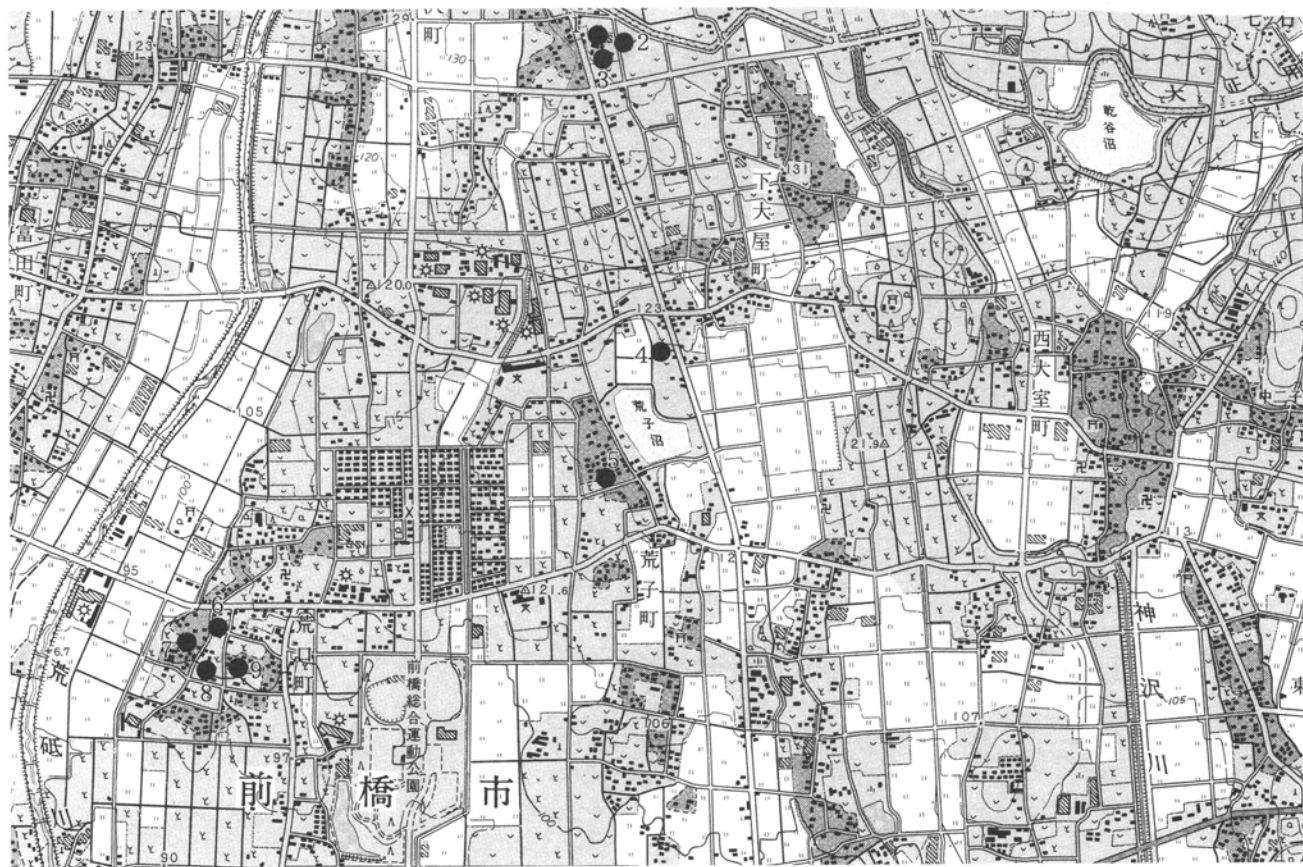


図2 荒砥荒口・東原B遺跡分布図（色の濃い部分が台地上・番号は図1と同じ）（1/25,000「大胡」）

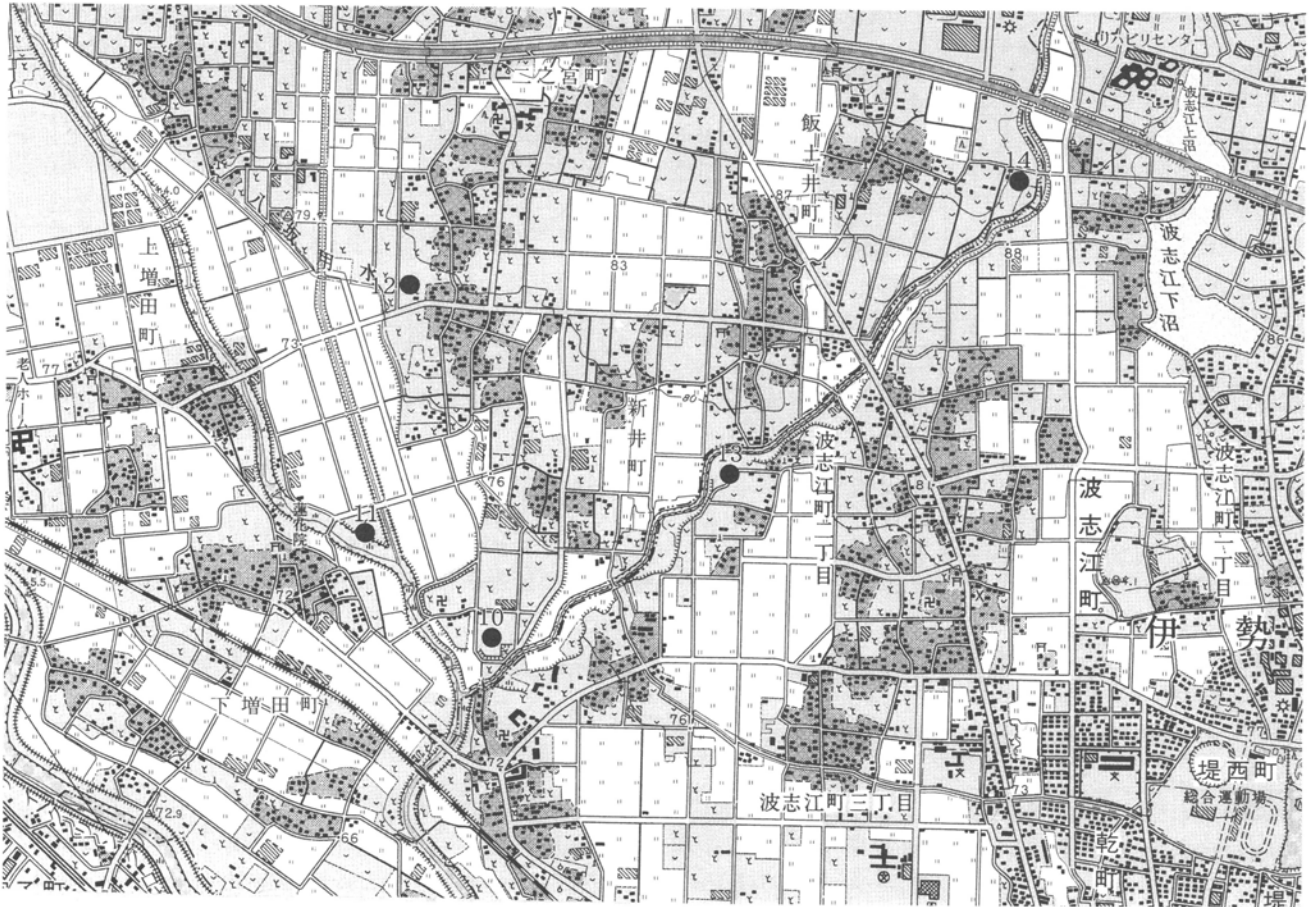


図3 荒砥前原・波志江中野面遺跡分布図（色の濃い部分が台地上・番号は図1と同じ）（1/25,000「大胡」）

を指してはいない（便宜的にこの名称を用いる）。

現在この地域は弥生時代後期の遺構は少なく、集落の規模も小規模であり、集落の増加は弥生時代終末から古墳時代前期を待たなくてはならない。しかし荒砥地域には弥生時代中期の遺構・遺跡を確認することができる。弥生時代中期の遺跡は前橋市内荒砥島原遺跡・荒砥前原遺跡・荒口前原遺跡・今井白山遺跡、粕川村の西迎遺跡・伊勢崎市西太田遺跡があり、井野川流域の新保地域と同時期の遺跡である。荒砥地域の遺跡は低地に面した台地の上に存在している。以前より遺跡群はすべてが小集落であるとされていたが、筆者の検討では遺跡は小規模ではないことが分かってきた。その理由は荒砥地域の発掘調査は昭和50年代から60年代まで圃場整備事業として広大な面積の調査が継続してきたが、各々の遺跡の調査面積が小さく、その結果遺跡の調査件数が多くなった。そしてその一つ一つに遺跡名が冠されてきた。この結果遺跡数は非常に多く、かつ小規模な遺跡が多いとの印象が定着した。そこで弥生時代中期の南東北系の土器と栗林式土器が相伴して出土した住居跡を検出した荒砥荒口遺跡周辺を見ると東500mに弥生時代から古墳時代の住居跡が検出された鶴谷遺跡群、北200mには古墳時代前期住居跡約20軒が検出された荒砥諏訪西遺跡、南200mに住居

跡と円形周溝墓を検出した荒砥北三木堂遺跡、南西200mには古墳時代前期の周溝墓を検出した荒砥北原遺跡等が接している。

また荒砥川と神沢川が合流する地点には弥生時代中期南東北系の土器を出土する荒砥前原遺跡、西北700mに弥生時代後期方形周溝墓を検出した下増田越渡遺跡、北1.2kmには古墳時代前期荒砥島原遺跡、西に隣接して荒砥宮原遺跡、北東1.2kmに古墳時代前期住居跡、周溝墓を検出した伊勢崎市波志江中野面遺跡が存在している。

このような遺跡群に共通する特徴は弥生時代中期から古墳時代前期に至る遺跡群が同じ低地を望む台地上に接して存在していることである。このように遺跡群は今まで別の遺跡と考えられていたが筆者は同じ低湿地・水田地を望む集落として差し支えないと考えている。その理由は同じ時代に同じ低湿地を望む集落が数百メートル先に住む人々と没交渉でいたとは考えられないからである。

つまりこのような遺跡群は別々の存在ではなく実は荒砥地域の小河川流域に所在する多くの低地部を望み群として遺跡が存在している。つまり弥生時代中期に始まった農耕可耕地への進出を継続していることが看取でき、我々は集落の一部を個々に発掘した結果別々の遺跡（集

落)と考えてきたが、実は同じ低地をのぞむ台地上の同一集落と考えることができる。さらに住居跡群の成立時期は弥生時代中期から始まり古墳時代へと継続していく。荒砥荒口遺跡北東1.2km、低地を南東にのぞむ東原B遺跡では古墳時代前期の住居跡が約20軒、前方後方形周溝墓2基を含む周溝墓16基と2基の甕棺墓が確認され、隣接する中山A遺跡では前方後方形周溝墓と方形周溝墓の2基、南に接する村主遺跡では古墳時代前期住居跡約20軒、南東500mに古墳時代前期住居跡約10軒の北田下遺跡が接している。つまりこのように低地を囲むように住居跡群と周溝墓群が接して立地することは荒口遺跡周辺と東原B遺跡周辺は住居跡群と周溝墓、居住域と墓群が低湿地を取り込むような形で立地する理想的な農耕集落である。荒砥地域にはこのような低地を望む小高い台地上に集落が多数存在している。集落立地の機能性は低湿地を望む農耕にあったと理解でき、農耕を志向していた集落であったことと理解できる。

5. 甕

では当時の荒砥地域にあった集落内の出土土器の構成を検討する。そこでここでも前稿と同一の手法を用い、荒砥地域を検討したい。

検証方法は弥生時代終末から古墳時代前期にかけ、当時の日常生活の煮炊きに使用される甕をもつ住居跡の甕を分類し数量及び比率を調べ実体把握することから始める。該当時期の毛野には4器種の甕が存在する。4器種とはS字状口縁台付甕・単口縁台付甕・土師器平底甕・樽式土器甕であり、4器種の甕がどのような出土傾向を持ち、他器種との構成を検討し土器様式の実態を把握しようとするものである。また土師器平底甕は弥生時代以来の伝統甕である平底を基調とし、樽式土器甕と同様に在地に出自を想定している(古墳時代前期を含む時代区分の中で樽式土器甕という用語を用いる。これは土器の型式名として使用するものである。樽式土器は古墳時代になっても消失しない。つまり古墳時代に存在・継続する土器の型式名として使用する)。

荒砥地域16遺跡全体の甕出土比率はS字状口縁台付甕272個体22.9%、単口縁台付甕161個体13.5%、土師器平底甕646個体54.3%、樽式土器甕111個体9.3%である。延べ軒数はS字状口縁台付甕132軒24.2%、単口縁台付甕90軒16.5%、土師器平底甕248軒45.5%、樽式土器甕75軒13.8%である(表1～4・図4～7)。表5～8、図8～11は井野川流域の資料である。両資料を比較すると、井野川流域のS字状口縁台付甕と荒砥地域の土師器平底甕が各々逆の立場で数値に表れている。単口縁台付甕と樽式土器甕の比率は荒砥地域では井野川流域より高い数値を示し、井野川流域と比較して単口縁台付甕で荒砥が4.2%、樽式土器甕は荒砥が4.1%勝っている。次に単器

種甕の住居跡軒数はS字状口縁台付甕は荒砥が井野川流域より5軒多く比率では5.2%低く、土師器平底甕は14.4%荒砥が高い比率を示している。甕単器種を出土する住居跡を見ると出土比率で54.3%の土師器平底甕は21.1%と半分以下の比率になる。また単口縁台付甕・樽式土器甕も単器種になると低い数値を示す。そして荒砥地域と井野川流域の共通点は単器種甕を持たない複数器種の甕を持つ住居跡が多いということにある。つまり荒砥地域も井野川流域の集落の人々は決まった器種の甕はないことが看取できる。それでは単器種の甕を持つ住居跡はどうか、図5、表2にあるS字状口縁台付甕単器種住居跡は芳賀団地遺跡でS字状口縁台付甕が4軒確認されているが、土師器平底甕も同様に4軒が検出されている。下境遺跡では15軒の土師器平底甕単器種甕の住居跡が検出されたが、同一遺跡内でS字状口縁台付甕単器種甕住居跡2軒、単口縁台付甕単器種甕住居跡2軒も確認され、集落内での統一は認められない。波志江中野面遺跡ではS字状口縁台付甕単器種の甕を持つ住居跡が7軒と荒砥地域と井野川流域全域をあわせて一番高い比率を示す。しかし、中野面遺跡の土師器平底甕の延べ軒数は17軒を数え、S字状口縁台付甕は出土量比、延べ軒数とも卓越しているが、大多数の住居跡ではS字状口縁台付甕だけの構成を選択してはいない。つまり荒砥地域では東海のS字状口縁台付甕を主体とした東海の土器様式はなく、しかし最大出土量の土師器平底甕を中心とした土器構成でもなく、様々な地域の土器が在地の土器の中に混在している。

つまり甕は複数器種がどちらも75.4%(井野川流域)、64.6%(荒砥地域)という数値が認められる。

では次に外来土器の出土傾向はどうか、荒砥上ノ坊遺跡は北陸の土器が多数出土し、報告書でも北陸との関連を指摘し注目されていた遺跡である。しかし表4、図7で分かるように北陸系土器が量比的に多量に出土しても実は東海系の遺物を出土する住居跡と延べ軒数では同数の11軒なのである。そして上ノ坊遺跡の最大の延べ軒数は土師器平底甕23軒である。荒砥上ノ坊遺跡の土師器平底甕と樽式土器甕を出土する延べ軒数の合計は36軒と最大量を示す。つまり荒砥地域では北陸系の土器様式はなく、また東海のS字状口縁台付甕を主体とした東海の土器様式でもない。しかし最大出土量の土師器平底甕を単器種選択してる事実もなく、様々な地域の土器が在地の土器の中に混在している。

6. 周溝墓から見た土器様相

ここまで住居跡出土の土器を検討し、集落内での土器様相を見たが、次に井野川流域と荒砥地域の墓出土土器を比較したい。まず井野川流域下佐野遺跡を概観する。下佐野遺跡からは26基の周溝墓が検出されている(表

表 1

遺 跡 名	S字壔	単台壔	土壔	樽壔	壔総数	総数	壔軒数	壔率	S率	単台率	土率	樽率
内堀遺跡	23	21	61	46	151	376	50	40.1	15.2	13.9	40.3	30.4
荒砥上ノ坊遺跡	5	9	69	21	104	269	28	38.6	4.8	8.6	66.3	20.1
荒砥前原遺跡	1	8	14		23	61	7	37.7	4.3	34.7	60.8	
荒砥島原遺跡	8	3	4		15	31	7	48.3	53.3	20	26.6	
荒砥二之堰遺跡	26	7	6		39	72	12	54.1	66.6	17.9	15.3	
飯土井上組遺跡	7	2	7		16	51	2	31.3	43.7	12.5	43.7	
芳賀団地遺跡	35	8	38		81	194	37	41.7	43.2	9.8	46.9	
横俵遺跡	14	19	73	2	108	298	32	36.2	12.9	17.5	67.5	1.8
柳久保遺跡	19	3	28		50	102	10	49	38	6	56	
村主・谷津遺跡	0	5	29	20	54	161	20	33.5	0	9.2	53.7	37
鶴谷遺跡群II	1		1	1	3	25	2	12	33.3		33.3	33.3
北田下遺跡	0	1	22	7	30	97	11	30.9	0	3.3	73.3	23.3
下境 I・II遺跡	26	28	112	3	169	401	41	42.1	15.3	16.5	66.2	1.7
荒砥諏訪西遺跡 I	54	42	123	0	219	511	28	42.8	24.7	19.2	56.2	0
東原 B 遺跡	2	3	31	10	46	91	19	50.5	4.3	6.5	67.4	21.7
波志江中野面遺跡	51	2	28	1	82	204	25	40.1	62.1	2.4	34.1	1.2
計16遺跡	272	161	646	111	1190	2944	331	40.4	22.9	13.5	54.3	9.3

表 2

遺 跡 名	S字壔	単台壔	土壔	樽壔	その他	合計
内堀遺跡	1	0	8	7	27	50
荒砥上ノ坊遺跡	0	0	1	1	17	28
荒砥前原遺跡	1	1	1	0	2	7
荒砥島原遺跡	1	0	0	0	3	7
荒砥二之堰遺跡	3	0	0	0	7	12
飯土井上組遺跡	0	0	0	0	2	2
芳賀団地遺跡	4	0	4	0	16	37
横俵遺跡	1	0	3	0	22	32
柳久保遺跡	0	0	1	0	7	10
村主・谷津遺跡	0	0	3	1	14	20
鶴谷遺跡群II	0	0	0	0	1	2
北田下遺跡	0	1	6	1	3	11
下境遺跡	2	2	15	1	18	41
荒砥諏訪西遺跡 I	3	0	9	0	16	28
東原 B 遺跡	0	0	7	2	10	19
波志江中野面遺跡	7	0	1	0	16	25
計16遺跡	23	4	59	13	181	331

表 3

遺 跡 名	S字壔	単台壔	土壔	樽壔	合計
内堀遺跡	14	12	31	29	86
荒砥上ノ坊遺跡	5	6	23	13	47
荒砥前原遺跡	1	3	5		9
荒砥島原遺跡	5	3	3		11
荒砥二之堰遺跡	11	4	6		21
飯土井上組遺跡	2	1	1		4
芳賀団地遺跡	22	7	24		53
横俵遺跡	9	14	29	2	54
柳久保遺跡	8	3	8		19
村主・谷津遺跡	0	5	15	13	33
鶴谷遺跡群II	1		1	1	3
北田下遺跡	0	1	10	4	15
下境 I・II遺跡	16	15	33	3	67
荒砥諏訪西遺跡 I	17	11	25	0	53
東原 B 遺跡	2	3	17	9	32
波志江中野面遺跡	19	2	17	1	39
計16遺跡	132	90	248	75	546

表 4

遺 跡 名	東海	北陸	畿内	樽	土壔	他	計
内堀遺跡	19	4	5	29	31	2	90
荒砥上ノ坊遺跡	11	11	4	13	23	0	62
荒砥前原遺跡	2	0	0	0	5	1	8
荒砥島原遺跡	7	0	2	0	3	0	12
荒砥二之堰遺跡	11	0	0	0	6	0	17
飯土井上組遺跡	2	0	2	0	1	0	5
芳賀団地遺跡	26	1	6		24	0	57
横俵遺跡	14	5	4	2	29	0	54
柳久保遺跡	8	0	6	0	8	0	22
村主・谷津遺跡	3	0	5	13	15	1	37
鶴谷遺跡群II	2	0	1	1	1	0	5
北田下遺跡	2	0	1	6	10	0	19
下境 I・II遺跡	16	1	1	19	33	1	71
荒砥諏訪西遺跡 I	19	3	12	3	25	0	62
東原 B 遺跡	3	1		9	17	0	30
波志江中野面遺跡	19	0	2	1	17	0	25
計16遺跡	164	26	51	96	248	5	576

9)。

表を見て分かるように出土が一番多いのは56個体の壺、続いて33個体の S 字状口縁台付甕である。S 字状口縁台付甕が出土する墓は総数26基中11基と全体の42%で

図 4

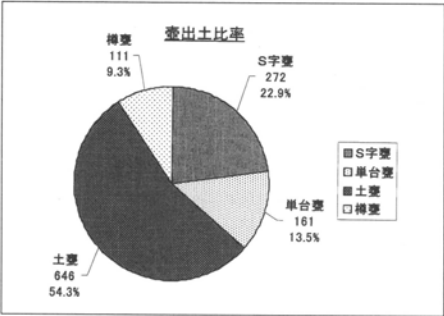


図 5

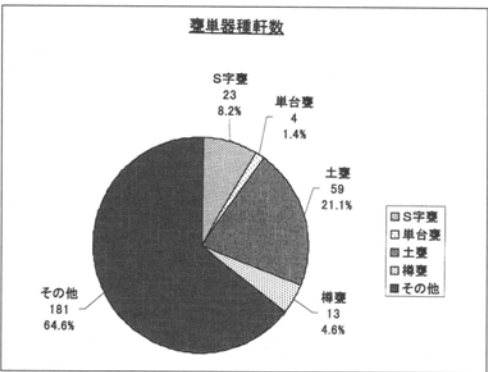


図 6

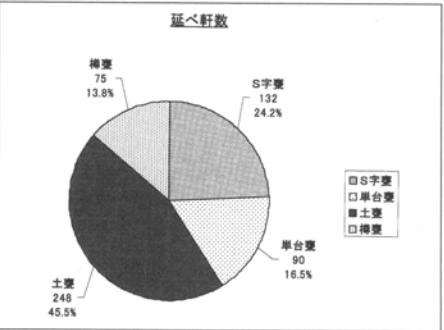
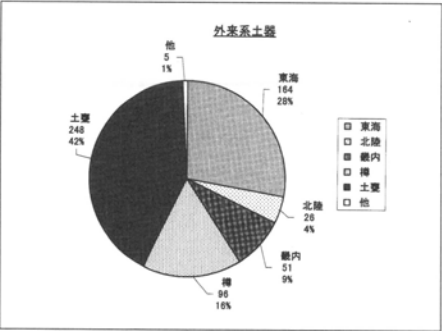


図 7



ある。つまり井野川流域最大の S 字状口縁台付甕を出土する集落の墓の半分以上からは東海様式の甕 S 字状口縁台付甕は出土しない。また畿内系の小型埴・二重口縁壺が出土する墓は 6 基、北陸系の土器を出土する墓が 3 基、

表 5

遺 跡 名	S字甕	単台甕	土甕	樽甕	甕総数	総数	甕軒数	甕率	S率	単台率	土率	樽率
熊野堂・雨壺遺跡	6	12	13	8	39	70	10	55.7	15.3	30.7	33.3	20.5
新保遺跡	43	16	44	12	115	229	24	50.2	37.3	13.9	38.2	10.4
新保田中村前遺跡	24	1	19	15	59	102	14	57.8	40.6	1.6	18.6	25.4
八幡遺跡	44	9	28	12	93	178	19	52.2	47.3	9.6	30.1	12.9
高崎情報団地遺跡	35	4	16	2	57	126	25	45.2	61.4	7	28	3.5
保渡田遺跡Ⅶ	11	8	10	7	36	72	9	50	30.5	22.2	27.7	19.4
倉加野万福寺遺跡	19	1	4		24	48	5	50	79.1	4.1	16.6	
下斉田・滝川遺跡	11	11	25		47	99	3	47.4	23.4	23.4	53.1	
下佐野遺跡	129	4	43		176	333	37	52.8	73.2	2.2	24.4	
舟橋遺跡	11		5		16	33	6	48.4	68.7	0	31.2	
元総社西川遺跡	14	3	2	1	20	32	4	62.5	70	15	10	5
棚島川端遺跡	95	6	46	9	156	282	43	55.3	60.8	3.8	29.5	5.8
12遺跡合計	442	75	255	66	838	1604	199	51.9	50.9	10.3	30.7	8.1

図 8

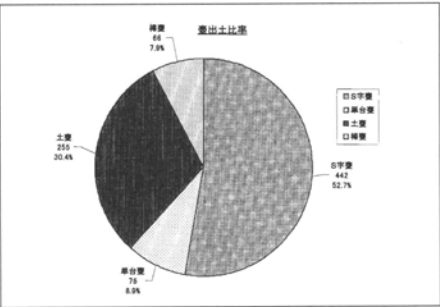


表 6

遺 跡 名	S字甕	単台甕	土甕	樽甕	その他	合計
熊野堂・雨壺遺跡	0	0	0	0	7	10
新保遺跡	0	0	2	1	16	24
新保田中村前遺跡	1	0	0	0	10	14
八幡遺跡	3	0	0	1	10	19
高崎情報団地遺跡	2	1	1	0	10	25
保渡田遺跡Ⅶ	0	0	0	1	8	9
倉加野万福寺遺跡	0	0	0	0	2	5
下斉田・滝川遺跡	0	0	0	0	3	3
下佐野遺跡	5	0	1	0	20	37
舟橋遺跡	1	0	1	0	3	6
元総社西川遺跡	1	0	0	1	2	4
棚島川端遺跡	5	1	4	0	10	15
12遺跡合計	18	2	9	4	101	171

図 9

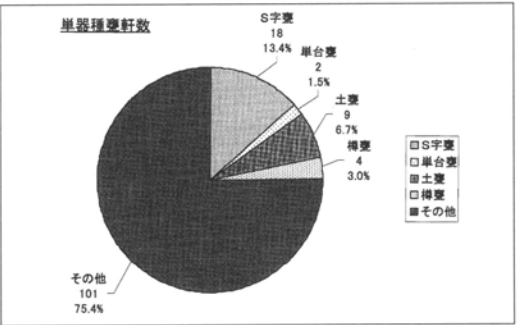


表 7

遺 跡 名	S字甕	単台甕	土甕	樽甕	合計
熊野堂・雨壺遺跡	3	6	7	4	20
新保遺跡	13	6	18	6	43
新保田中村前遺跡	11	1	11	6	29
八幡遺跡	13	8	12	4	37
高崎情報団地遺跡	20	2	11	2	35
保渡田遺跡Ⅶ	4	5	7	5	21
倉加野万福寺遺跡	3	1	3		7
下斉田・滝川遺跡	2	3	3		8
下佐野遺跡	35	4	19		58
舟橋遺跡	5	0	4	0	9
元総社西川遺跡	3	1	2	1	7
棚島川端遺跡	34	6	30	6	43
12遺跡合計	146	43	127	34	317

図10

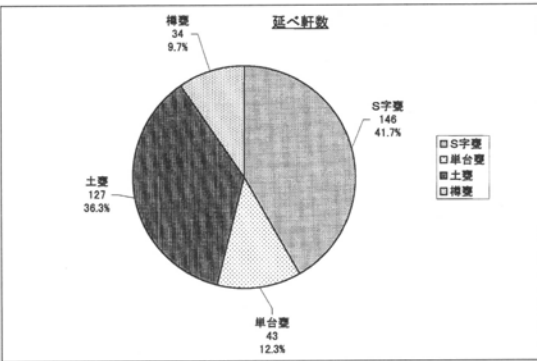
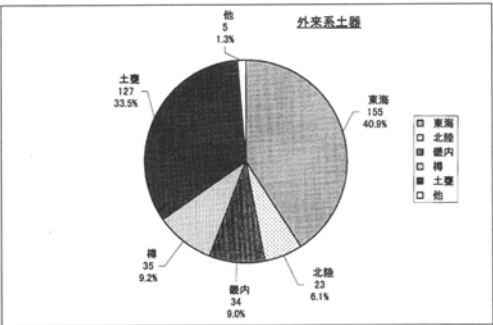


表 8

遺 跡 名	東海	北陸	畿内	樽	土甕	他	計
熊野堂・雨壺遺跡	3	0	1	4	7	1	17
新保遺跡	16	1	5	6	18	0	46
新保田中村前遺跡	12	1	12	6	11	0	43
八幡遺跡	15	5	1	4	12	0	37
高崎情報団地遺跡	20	4	0	2	11	2	43
保渡田遺跡Ⅶ	7	0	1	5	7	0	17
倉加野万福寺遺跡	3	2	0	0	3	0	8
下斉田・滝川遺跡	3	0	0		3	0	7
下佐野遺跡	35	6	6		19	1	69
舟橋遺跡	5	0	1	0	4	0	10
元総社西川遺跡	2	0	1	1	2	1	7
棚島川端遺跡	34	4	6	7	30	0	15
12遺跡合計	155	23	34	35	127	5	319

図11



さらに樽式土器を出土する墓が2基確認できる。また7区3号方形周溝墓ではS字状口縁台付甕と樽式土器甕が共伴出土している。他に4号方形周溝墓ではS字状口縁台付甕と単口縁台付甕、土師器平底甕、同5号方形周溝墓ではS字状口縁台付甕と畿内小型埴、同6号方形周溝墓ではS字状口縁台付甕と北陸系器台、同8号方形周溝墓ではS字状口縁台付甕と赤彩された壺や椀、I地区D

区2号方形周溝墓ではS字状口縁台付甕と畿内系と東海系の壺と共伴する。このように下佐野遺跡周溝墓出土土器はS字状口縁台付甕と共伴する土器群は在地土器に混じり複数他地域の土器が混在している実体を読みとれる。このような出土は下佐野遺跡の住居跡群出土土器の出土傾向と符合する。

一方荒砥地域では東原B遺跡と中山A遺跡で計20基の

表9 下佐野遺跡

遺 構 名	S字甕	単台甕	土甕	樽甕	壺	高坏	器台	埴	鉢	他	総計	備 考
I地区A区1号方形周溝墓	2				1	1					4	
I地区A区2号方形周溝墓	1										1	S字状口縁台付甕脚片
同 3号方形周溝墓						1					1	高坏脚片
同 4号方形周溝墓	14	1			13	1					29	内行花文鏡・前方後方形周溝墓 単口縁台付甕・二重口縁壺・土師器平底甕
同 5号方形周溝墓	2				3			4		1	10	小型埴
同 6号方形周溝墓	1				3		1				5	北陸系器台
同 7号方形周溝墓					2						2	
同 8号方形周溝墓	2				6					2	10	赤彩壺・椀
同 9号方形周溝墓								1			1	
同 10号方形周溝墓						1					1	北陸系高坏
同 12号方形周溝墓					2	1					3	ひさご壺
I地区C区1号方形周溝墓					1			1			2	小型埴
同 2号方形周溝墓					1						1	ひさご壺
同 3号方形周溝墓	1				4	2					7	ひさご壺
同 4号周溝墓												遺物なし。形状不明。
同 5号方形周溝墓	2				5			1			8	ひさご壺・小型埴・二重口縁壺（畿内系）
同 6号方形周溝墓					2			1		1	4	小型埴
同 7号方形周溝墓	4				4						8	
I地区D区1号方形周溝墓			2		2						4	ひさご壺
同 2号方形周溝墓	2				4						6	二重口縁壺（畿内・東海）
寺前地区3号方形周溝墓					3						3	二重口縁壺（東海）
下佐野II地区												
7区1号方形周溝墓						1					1	
7区2号方形周溝墓												遺物なし。
7区3号方形周溝墓	2		4	1	1	1	1				10	樽式土器甕
7区4号方形周溝墓				1			1				2	樽式土器甕
7区5号周溝墓												遺物なし。楕円形
計 26 基	33	1	6	2	56	8	3	8		4	123	
述 べ 数	10	2	2	2	16	7	3	5		3		

表10 倉加野万福寺遺跡

遺 構 名	S字甕	単台甕	土甕	樽甕	壺	高坏	器台	埴	鉢	他	総計	備 考
1号方形周溝墓	2				12	2	3	3			22	ひさご・二重口縁壺(畿内・東海)・小型埴
2号方形周溝墓					1	1					2	
3号方形周溝墓											0	掲載遺物無し。S甕の破片出土（記載）
4号方形周溝墓											1	二重口縁壺（畿内）
5号方形周溝墓											1	壺？
6号方形周溝墓					2						2	ひさご壺
7号方形周溝墓											0	S甕破片出土（記載）
8号方形周溝墓					2	1		1			4	小型埴
9号方形周溝墓					1	1		2			4	小型埴
10号方形周溝墓											0	遺物無し
11号方形周溝墓	1							1			2	
12号方形周溝墓					1						1	
計 12 基	3				19	5	3	7			39	

周溝墓・甕棺墓が確認できた。20基の墓のうちS字状口縁台付甕が確認できたのは第13号方形周溝墓で破片が確認できたのみである。表1にあるように東原B・中山A・村主・北田下遺跡50軒の甕を持つ住居跡から出土したS字状口縁台付甕は2個体2軒の出土である。

この地域の遺跡からは住居跡群墓群ともにS字状口縁台付甕の検出は少ない。しかしS字状口縁台付甕以外の外来土器を出土する住居跡は13軒が確認でき、外来土器を意図的に拒絶しているとは認められない。村主遺跡では小型埴が6号・18号・29号・49号住居跡から、またひさご壺は37・49号住居跡から出土し、34号住居跡では樽式土器と小型埴・ひさご壺が共伴出土している。さらに29号・33号・35号・40号・46号住居跡からは単口縁台付甕が出土している。

東原B遺跡の南約5km、現在の伊勢崎市波志江町に25

軒の甕を持つ住居跡と20基の周溝墓を検出した波志江中野面遺跡がある。住居跡出土S字状口縁台付甕は51個体と甕のうちで62%を占め、周溝墓出土S字状口縁台付甕は12個体37.5%を占める。波志江中野面遺跡の住居跡25軒のうちS字状口縁台付甕を出土する住居跡の延べ軒数は19軒76%と高い比率を占め、周溝墓は6基30%である。またS字状口縁台付甕を出土する住居跡は16号・30号住居跡で小型埴と、7号方形周溝墓周溝墓でS字状口縁台付甕、樽式土器・赤井戸式土器と北陸系の高坏が出土している。住居跡の土器構成はS字状口縁台付甕が多いがS字状口縁台付甕を主体とする東海様式ではない。周溝墓から出土するS字状口縁台付甕は12個体、S字状口縁台付甕が出土した周溝墓の数は20基中6基である。7号方形周溝墓は6個体のS字状口縁台付甕の他1個体の単口縁台付甕、5個体の土師器平底甕とともに、樽式土器、

表11 東原B・中山A遺跡

遺構名	S字甕	単台甕	土甕	樽甕	壺	高坏	器台	埴	鉢	他	総計	備考
1号周溝墓			4	2	1		2			1	10	樽壺・赤採・前方後方形・樽甕・二重口縁壺
2号周溝墓			12		10	3	3	1		5	34	前方後方形・赤採・樽甕
3号方形周溝墓			2		1	7	1			1	12	
4号円形周溝墓												遺物なし。
5号方形周溝墓			8			2	1				11	樽甕
6号方形周溝墓			3			1	1				5	樽甕
7号周溝墓										1	1	方形～楕円形。
8号周溝墓			1			1					2	方形～楕円形。遺物なし。
9号方形周溝墓			1								1	
10号周溝墓												楕円形？遺物なし。
11号周溝墓												楕円形。遺物なし。
13号方形周溝墓	1?		2	1							4	樽甕
14号方形周溝墓		1	3		1	2					7	前方後方形周溝墓。樽甕。
15号方形周溝墓			2			2					4	
16号方形周溝墓			1			2					3	前方後方形周溝墓
17号方形周溝墓		1	1							1	3	前方後方形周溝墓。樽甕。B II
1号甕棺												樽式土器
2号甕棺												樽式土器
中山A遺跡												
1号前方後方形周溝墓			2				2		2		6	
2号周溝墓												遺物無し
計 20 基	1	2	42	3	13	20	10	1	2	9	103	

表12 波志江中野面遺跡

遺構名	S字甕	単台甕	土甕	樽甕	壺	高坏	器台	埴	鉢	他	総計	備考
1号方形周溝墓	2		3		5	4	1		3		18	稜高坏・ひさご壺・二重口縁壺
2号方形周溝墓					3						3	円形浮文
3号方形周溝墓	1				2	1		1			5	頸部突帯
4号方形周溝墓	1		1		1				1		4	
5号方形周溝墓			1		8	2		1	2		14	二重口縁壺・
6号方形周溝墓			1		1	1					3	
7号方形周溝墓	6	1	5		12	2	4		3		33	樽・赤壺・北陸高坏
8号方形周溝墓					1	2					3	
9号方形周溝墓					2		1				3	
10号方形周溝墓							1				1	
11号周溝墓												形状不明。掲載遺物なし。
12号方形周溝墓												掲載遺物なし。
13号方形周溝墓		1				1			3		5	
14号方形周溝墓		3	2		5				1		11	前方後方形周溝墓
B区1号方形周溝墓			1		2				1		4	
2号周溝墓												形状不明
3号方形周溝墓					4		1		1		6	ひさご壺
4号方形周溝墓					1				1		2	
C区1号方形周溝墓	1				3						4	折り返し口縁壺
D区1号方形周溝墓	1				1						2	
計 20 基	12	5	14		51	13	8	2	16		121	

赤井戸式土器、北陸系の高坏が共伴して出土し、中野面遺跡も東海様式ではなく、外来土器は複数地域にその出自を求めることができる。

さて東原B・北田下・村主遺跡の土器構成を見ると外来の土器の出土が遅く、井野川流域に比べ古墳文化の取り入れが遅いとの指摘があった。しかし、S字状口縁台付甕の出土例は非常に少ないが、小型埴あるいはひさご壺、二重口縁壺、北陸系土器が出土することから量は少ないが土師器化への始動は開始されていると考える事ができる。さらに東原B遺跡周辺と中野面遺跡では東海形式S字状口縁台付甕の出土量に差が認められるが、同様な現象も井野川流域で確認できる。

井野川流域下佐野遺跡南東約1.5kmに倉賀野万福寺遺跡がある。甕を持つ住居跡は5軒、12基の方形周溝墓が確認されている。住居跡出土遺物をみると遺跡全体の出

土甕の79.1%はS字状口縁台付甕であるが、実体は15個体が1軒から出土し、2軒からはS字状口縁台付甕は出土していない。12基の周溝墓を概観するとS字状口縁台付甕は3個体2基であり、周溝墓から出土する器種は小型埴や二重口縁壺、ひさご壺等が確認され、倉賀野万福寺遺跡周溝墓では複数地域からの外来土器が混在し、S字状口縁台付甕が少ない。

7. 土器から見た井野川流域と荒砥地域

さて前稿では群馬県内の古墳時代前期集落の住居跡群出土土器の実体把握を目的に土器を検討した。結果は井野川流域はS字状口縁台付甕を甕の主体とする東海様式の土器群であるとする事はできなかった。今回は同様に荒砥地域の遺跡と周溝墓、さらには下佐野遺跡、倉賀野万福寺遺跡周溝墓検出土器を検証してみたが、ここで

もS字状口縁台付甕を甕の主体とする東海の土器様式は確認できず、井野川流域での周溝墓と荒砥地域の墓の間の土器構成にも大きな隔たりは見いだすことはできなかった（ただ井野川流域ではS字状口縁台付甕が多く荒砥地域では土師器平底甕が多い、しかしどちらの甕も各々の地域で土器構成の主体となるには至っていない）。事実は複数外来地域の土器が混在して出土し、土師器化していく過程を認めることができた。井野川流域、荒砥地域出土土器群の傾向から様々な複数外来土器の存在を確認し、その混在状況は周溝墓が接する住居跡群と同様な傾向を示すことが認められた。さてさらに東海様式・S字状口縁台付甕にこだわると前稿の結論のように下佐野遺跡住居跡で出土した129個体のS字状口縁台付甕は土器構成の中で東海様式の器種構成を持つものは極めて少ない、また周溝墓から出土したS字状口縁台付甕は33個体、単口縁台付甕1個体、土師器平底甕は6個体を数えるが、S字状口縁台付甕を出土する周溝墓は26基中10基38%で、墓出土土器の構成も東海様式と認定できるものは無い。さらに実体はS字状口縁台付甕を出土する10基のうち6基は明確に東海の要素とは異なる土器と共伴する。その内訳はI地区A区4号前方後方形周溝墓では単口縁台付甕、土師器平底甕をはじめS字状口縁台付甕と小型埴と共伴するもの1基、北陸系の土器と共伴するもの1基、畿内系の二重口縁壺と共伴するもの1基、樽式土器と共伴するもの1基、さらには赤彩された壺と共伴するものを含めるとS字状口縁台付甕が出土する10基のうち6基は明確に東海様式ではない事が確認できる。したがって筆者が前稿で確認した住居跡出土土器の混在状態は周溝墓出土土器も同様であることが分かる。下佐野遺跡に隣接する倉賀野万福寺遺跡でも住居跡出土土器はS字状口縁台付甕が甕の中で79.1%を占めながらも出土は1軒に集中し、5軒のうち2軒からはS字状口縁台付甕は出土せず、周溝墓出土のS字状口縁台付甕は12基のうち2基3個体の出土である。さらにS字状口縁台付甕を出土した1号方形周溝墓からは小型埴が共伴し、他に小型埴を出土する周溝墓は計3基が確認されている。下佐野遺跡と倉賀野万福寺遺跡の計38基の周溝墓のうちS字状口縁台付甕を出土する墓は全体の12基31.5%で土器の内容も様々な地域の外来土器が共伴している。井野川流域の下佐野遺跡・倉賀野万福寺遺跡の2遺跡では住居跡出土の土器群と同じ構成を持つ土器群が周溝墓からも検出され、土器構成から同じ集落内の居住者が被葬者であったことを示していると言える。つまり、墓出土土器の検討から被葬者は明らかに毛野在地の社会に生きた事を証明していると考えられる。

一方荒砥地域東原B・中山A遺跡の20基の周溝墓・甕棺墓からは1点のS字状口縁台付甕片が確認でき、東原B遺跡住居跡からは2点、北田下、村主遺跡からはS字

状口縁台付甕は検出されていない。しかし南5kmに所在する中野面遺跡では住居跡のS字状口縁台付甕の出土は25軒51個体甕の中で62%を占める。また土師器平底甕は28個体で、両甕の延べ軒数はS字状口縁台付甕が19軒、土師器平底甕が17軒と量比の差は延べ軒数には数値としてあられず、結果どちらも土器構成の中で甕の主体とはならない。周溝墓を見るとS字状口縁台付甕は12個体、単口縁台付甕5個体、土師器平底甕14個体と土師器平底甕が2個体多いがここでもどちらかが主体とならず、7号前方後方形周溝墓ではS字状口縁台付甕6個体、単口縁台付甕1個体、土師器平底甕5個体にあわせ樽式土器壺・赤井戸式土器壺・北陸系の高坪が共伴出土している。ここでも住居跡出土土器、周溝墓出土土器構成の主体はS字状口縁台付甕・土師器平底甕・単口縁台付甕の特定はできず、土器の構成は複数外来地域の土器と在地の土器が混在することに特徴が認められる。

さて荒砥地域では東原B遺跡・中山A遺跡・北田下遺跡・村主遺跡グループはS字状口縁台付甕は非常に少ないが、近接する中野面遺跡ではS字状口縁台付甕は井野川流域と量比的には遜色ない。いずれにしろ東原B遺跡周溝墓出土土器群の構成は集落出土土器と同じ傾向を示し、中野面遺跡でも集落と墓群の土器構成は各々共通している。荒砥地域と井野川流域全体の比較ではS字状口縁台付甕と土師器平底甕の量比が違うことと荒砥地域は遺跡によってS字状口縁台付甕の量比の大きさが目立つことが分かる。しかし倉賀野万福寺遺跡の周溝墓群ではS字状口縁台付甕は少ない。さらに荒砥地域では外来の土器も東海・北陸・畿内系土器が多数確認でき、荒砥上ノ坊遺跡では多数の北陸系土器が出土し注目を集めたが、東海系・畿内系土器が樽式土器と出土し、最大出土の甕は土師器平底甕である。上ノ坊遺跡例ではむしろ積極的に複数地域からの外来土器の取り入れを看取することができ、また村主・北田下遺跡は土師器平底甕に嗜好が向いていたとの理解が成り立つ。

いずれにしろ井野川流域と荒砥地域の集落・墓域の出土土器の検証からはS字状口縁台付甕を主体とした東海様式の土器組成は確認できなかった。

8. 墓から見た井野川流域と荒砥地域

以前筆者は県内の周溝墓の検討をした。略述すると群馬県内では周溝墓は円形や楕円形等の不定形の溝が巡る周溝墓が弥生時代に存在し、古墳時代になると方形区画が明瞭になり、4隅切れ方形周溝墓は弥生時代から継続している。また弥生時代は不定形の周溝墓とともに壺棺墓、礫床墓が併用して墓域を構成している。東原B遺跡では1・2号前方後方形周溝墓から樽式土器と二重口縁壺が出土し同時に壺棺墓が検出されるなど新しい墓制と弥生以来の伝統が共存するという現象を認めることがで

き、周溝墓からは土師器と樽式土器が共伴して出土し、同様に下佐野遺跡、倉賀野万福寺遺跡の周溝墓も複数外来地域の土器とともに在地の土器群の共伴が認められる。このような現象は伝統的な弥生時代の人々が古墳時代に周溝墓を取り入れたことが分かる。並行して荒砥地域と井野川流域に於いて共通して新しい墓制を取り入れたわけである。

また井野川流域に所在する下佐野遺跡と倉賀野万福寺遺跡の周溝墓は合計で38基のうち東海のS字状口縁台付甕を出土する墓は全部で13基38%であり、その他多くの外来土器が混在出土し東海地方のみとの交流だけでは理解できないことが分かる。荒砥でも同様な傾向が認められ、同時期に荒砥地域と井野川流域には方形周溝墓に変換している。そして方形周溝墓を取り入れた彼らは明らかに生前使用した土器構成を持って葬られた。さてこのように井野川流域と荒砥地域では古墳時代前期になると方形周溝墓という墓制が同じように定着している。つまり、毛野在地の社会に方形周溝墓という墓制がすんなり採用されたのは毛野内部での共同体の成立を認め、その社会が持つ流通網が継続的に機能したことを認めることができる。さらに毛野の人々は弥生時代中期から継続的に他地域との活発な交流を維持し、やがて古墳文化を取り入れたのである。

9. まとめ

井野川流域と荒砥地域の住居跡・周溝墓出土土器の構成をみた。井野川流域住居跡ではS字状口縁台付甕の出土量比は52.7%で延べ軒数は41.7%に下がり、荒砥地域では土師器平底甕の出土量比は54.3%、延べ軒数は45.5%に下がる。両地域ともに出土量比は延べ軒数になると下がる傾向を示す。つまり井野川流域ではS字状口縁台付甕を複数個持つ住居跡が多く、荒砥地域では土師器平底甕を複数個持つ住居跡が多いことが分かる。しかし両地域ともに甕の混在状態は井野川流域で75.4%、荒砥地域では64.6%と単器種の甕を主体とするような土器構成をなさない。つまり両地域での古墳時代前期の土器様式は甕は複数種混在することが一般的であることがわかる。

さて井野川流域と荒砥地域住居跡群から出土した土器群の傾向はS字状口縁台付甕を主体とした土器様式ではない。一方周溝墓出土土器はどうであったか、下佐野遺跡周溝墓群出土土器はS字状口縁台付甕、小型埴、北陸系土器等の複数器種の外来土器とともに樽式土器の出土も確認でき、II地区7区3号方形周溝墓ではS字状口縁台付甕、土師器平底甕、樽式土器甕が共伴出土している。つまり墓群出土土器の構成は住居跡群出土土器の構成とおおきく異なることはない。東原B遺跡周溝墓群ではS字状口縁台付甕破片1個体のみの出土で、住居跡群50軒

では2個体のみの出土である。井野川流域倉賀野万福寺遺跡では12基の周溝墓のうちS字状口縁台付甕を出土するのは2基3個体である。このように近接する地域内でもS字状口縁台付甕に対する指向に違いが認められる。東原B遺跡ではS字状口縁台付甕は出土しないが小型埴・ひさご壺が確認でき、波志江中野面遺跡ではS字状口縁台付甕を含め畿内や北陸の外来土器が多数検出され、土師器平底甕住居跡も確認されている。しかしS字状口縁台付甕が少ない事は東原B遺跡が土師器導入を拒絶した結果ではない。なぜならばS字状口縁台付甕以外の外来土器が出土しているからである。そしてS字状口縁台付甕が少ないことは井野川流域と荒砥地域が異文化社会で井野川流域が移民集団である根拠はないと考える。なぜならば表1に表れるように東原B遺跡・北田下遺跡・村主遺跡では3遺跡の住居跡50軒からS字状口縁台付甕は東原B遺跡で2個体、他の2遺跡では出土しないが、小型埴・ひさご壺・北陸系外来土器が出土する。下佐野遺跡・倉賀野万福寺遺跡ではS字状口縁台付甕の出土量が多いが墓から出土するS字状口縁台付甕は両遺跡あわせて38基中13基で、小型埴・ひさご壺・北陸系土器・樽式土器が出土し、東原B遺跡あるいは波志江中野面遺跡住居跡・周溝墓群と同様な土器構成を見せる。

以上のように各集落間での外来土器の混在を示す出土傾向に強い共通性が指摘でき、従来指摘されたような東海様式の住居跡や、さらに東海様式を出土する周溝墓はほとんど確認できない。ここで強調したいのは集落と隣接する墓群から出土する土器構成は互いに強い共通性を持っている事がわかる。考古学では墓供献土器は被葬者の出自を表すとされてきた。そして関東地方の墓や古墳から東海系の壺やS字状口縁台付甕を出土すると東海の人々の移動等が指摘されてきた。しかし、S字状口縁台付甕と東海を結びつける前に周溝墓群に接する集落出土土器の土器構成と比較すると共通することが分かる。したがって墓の被葬者は生前暮らした場所の近くに葬られ、生前に使用した土器の構成をもって葬られたと考えられる。周溝墓は古墳時代の毛野の人々が受容し定着した墓制である。井野川流域下佐野遺跡・倉賀野万福寺遺跡の方形周溝墓出土土器は被葬者の出自を毛野の人であることを示す樽式土器、北陸・畿内・東海土器というまさに彼らが生前使用した土器構成で埋葬された。したがってここで取り上げた墓の被葬者は生前隣接する集落で生活していたと考えることができる。

10. おわりに

本稿では土器の新旧関係を検証してはいない。現在群馬県古墳時代前期の土師器の編年は東海地方のS字状口縁台付甕の組列を軸としたものである。さてその東海編年での一番古い型式はA類S字状口縁台付甕である。井

野川流域の熊野堂遺跡遺跡で廻間編年のA類S字状口縁台付甕片が1片出土した。口縁部の破片であり、他の土器との共伴関係は明確ではない。したがってこのS字状口縁台付甕がA類で群馬県では非常に古い可能性は指摘できるとどまる。なぜならば廻間遺跡と同様な分類検証は群馬県内ですだけの量はない。他の土器との比較対象の資料もない中で新旧の検証はなされない。またS字状口縁台付甕だけが東海形式の土器ではなく、S字状口縁台付甕が出土しないが樽式土器とひさご壺が共伴する荒砥地域の遺跡が井野川流域の遺跡群より新しいという根拠も証明はなされてはいない。そこで県内の土器群を新しい土器の分類視点をもって検討する必要がある。

毛野での土器の変質は視覚的、形相的に様々な外来社会との人・物・情報と接しながら成立した。汎列島的な地域社会の統一においても各々の社会内部で様々な社会背景の異なりが存在する。それは地形であり、社会体系であり、社会構造にある。そういった在地の地域性・地域個性をみないで一方的な東海からの外圧で統一するとの理解は早計である。しかし筆者は弥生時代社会構造が古墳時代社会構造に成長発展したとの理解はまだできない、古墳時代の成立には人・物・情報が様々に複雑に機能し、ある部分では同じだがある部分では全く新しい体系を伴い成立したと考えている。そういった視点から古墳時代前期の遺構・遺跡の出土土器を分類検証したいと考えている。つまり栗林式土器が樽式土器に変化したことと、樽式土器が土師器に変換したことは全く社会背景が異なり、栗林式土器から樽式土器への変質は集団内での系譜・出自という地域個性を発揮しているが、樽式土器から土師器への変質は全く文様に表れている個性が消滅してしまうからである。しかし、様々な複数外来系土器の混在するという共通性がある。つまりこれも当時の毛野の個性であると考えることができる。栗林式土器が樽式土器に変化したのとは社会背景の異なる変質である。つまり土器形式の変換・導入である。それは時間の経過による内的変化ではなく、人間によって選択された変革である。だから古墳時代前期の土師器は樽式土器の系譜を引かない。大木氏の指摘したように新しい技法とともに受容し、受け入れたものである。しかし、人の違いとみることではない。毛野の人々が新しい技法・技術を導入することはいとも簡単なことであるからだ。古墳時代の前期の土師器の分類は中期から後期への弥生土器の変質とは全く異なる認識で分類編年をしなくてはならない。古墳時代後期における甕の長胴化が竈出現という生活体系の変化・生活様式の違いから生まれることもある。ただ古墳時代前期が大きな政治性や戦乱によるとの視点だけでは土器や社会の変質は語れない。いずれにしろ毛野の人々は今までとは全く違う土器の形相を取り入れたのである。問題はなぜ複数地域の土器が混在して出

土するか理由を考えると始まる。そして今までと全く系譜を異にする土器はその後自分では変質もしなければ変化もしない。物は独自で進化・発展はしない。一方作り手・使用者には自由な選択がある。自由な意志をもった人間が土器を作り、使用する社会体系を構成したのである。ここでは墓の被葬者の生前の生活場を特定できたと思う。さらに同じ視点で古墳時代前期の社会構造の検討を継続したいと考えている。

(補註) 現在整理中であるが荒砥前原遺跡500mに萩原遺跡がある。年報報告では弥生時代から古墳時代前期に継続する遺跡が確認されている。

参考文献

- 相京建史・小島敦子 1992 『新保田中村前遺跡II』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
相京建史・小島敦子 1993 『新保田中村前遺跡III』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
秋池 武 1983 『倉加野万福寺遺跡』高崎市倉加野万福寺遺跡調査会
赤塚次郎 1990 『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財調査センター
赤塚次郎 1992 「東海系のトレース3・4世紀の伊勢湾沿岸地域」『古代文化I』
阿子島香 1983 「ミドルレンジセオリー」『考古学論叢I』芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会
イアン・ホッダー(深澤百合子訳) 1996 『過去を読む』フジインターナショナルプレス
飯塚卓二 1984 『熊野堂遺跡(1)』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
飯塚卓二 1989 『下佐野遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
飯塚卓二・女屋和志雄・関根慎二 1990 『熊野堂遺跡(2)』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
池田清彦 1992 『分類という発想』新潮選書
石川日出志 1998 「弥生時代中期関東の4地域の併存」『駿台史学』第102号
石坂 茂 1983 『荒砥島原遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
井野誠一 1991 『芳賀団地遺跡』前橋市教育委員会
梅澤重昭・橋本博文 『シンポジウム関東における古墳出現期の諸問題』学生社
梅澤重昭 1994 「“毛野”形成期の地域相—前方後方形墳及び周溝墓の分布を中心に—」『駿台代史学』91号
梅澤重昭 1994 「毛野の周溝墓と前方後方形周溝墓」『駿台史学』92号
大木紳一郎 1985 『荒砥前原遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
大木紳一郎 1994 「2号河川出土弥生土器について」『新保田中村前遺跡IV』
大木紳一郎 2001 第5章まとめ「元総社西川遺跡出土の古墳時代前期の土器について」『元総社西川遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
大塚久雄 1965 『共同体の基礎理論』岩波書店
大塚久雄 1966 『社会科学の方法』岩波書店
大塚久雄 1977 『社会科学における人間』岩波書店
小野和之 1987 『下斉田・滝川遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
小川英文 2000 「狩猟社会の農耕社会の交流：相互関係の視角」『交流の考古学』小川英文編 朝倉書店
金子浩昌 「新保遺跡出土の脊椎動物遺存体・骨角牙製品」『新保遺跡I』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
金子浩昌 1994 「新保田中村前遺跡出土の骨角器」『新保田中村前遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
加納俊介 1991 「東日本における後期弥生土器研究の現状と課題」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』東海埋蔵文化財研究会
加納俊介 2000 「S字甕の分類を考える」『S字甕を考える』第7回東海考古学フォーラム三重大会

- 川村浩司 1994 「関東南部における北陸土器の様相について」『庄内式土器研究VI』
- 川村浩司 1998 「土器の交流から見る北陸地方と群馬県地域」『人が動く・土器も動く』かみつけの里博物館
- 川村浩司 1999 「庄内並行期における上野出土の北陸系土器について」『庄内式土器研究XIX』
- 神戸聖語 1989 『八幡遺跡』高崎市教育委員会
- 神戸聖語 1991 『高崎情報団地遺跡』高崎市教育委員会
- 小泉範明・飯島義雄 1998 「石田川式土器の再検討(1)」『群馬県立歴史博物館紀要』第19号
- 小泉範明・井上昌美・飯島義雄 1999 「石田川式土器の再検討(2)」『群馬県立歴史博物館紀要』第20号
- 小泉範明・井上昌美・飯島義雄 2000 「石田川式土器の再検討(3)」『群馬県立歴史博物館紀要』第21号
- 小島敦子 1990 「墓域からみた集落論研究の基礎操作」『古代』第90号
- 小島敦子 1998 「荒砥上ノ坊遺跡」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 坂井 隆 1984 『熊野堂遺跡第三地区・雨壺遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 桜岡正信 2003 『武蔵型甕について』高崎市史研究17 高崎市市史編さん専門委員会
- 佐藤明人 1986 『新保遺跡Ⅰ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤明人 1988 『新保遺跡Ⅱ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤明人 1990 『有馬遺跡Ⅱ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤洋一郎 2002年『稲の日本史』角川選書337
- 設楽博巳 1986 「竜見町土器をめぐって」『第7回三県シンポジウム東日本における中期後半の弥生土器』北武蔵古代文化研究会・千曲川水系古代文化研究所・群馬県考古学談話会
- 下城 正 1989 『船橋遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 下城 正 1994 『新保田中村前遺跡Ⅳ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 下城 正 2000 『村主・谷津遺跡』群馬県教育委員会
- 白石光男 1992 『横俵遺跡』前橋市教育委員会
- 須藤 宏 1991 「集団と首長墓—群馬県太田市周辺の一分析—」『群馬県考古学手帳』2 群馬土器観会
- 大学合同考古学シンポジウム委員会編 2002 「弥生の『ムラ』から古墳の『クニ』へ」学生社
- 高橋龍三郎 2001 「総論：村落と社会の考古学」『現代の考古学6』朝倉書店
- 高橋浩二 1999 「S字状口縁付甕の伝播とその評価」『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室10周年記念論集—』
- 高橋浩二 1997 「北陸における古墳出現期の社会構造—土器の計量的分析と古墳から—」『考古学雑誌』第80巻3号 日本考古学会
- 高崎市史編纂委員会 1998 『新編 高崎市史』資料編1 原始古代
- 田口一郎 1978 『鈴ノ宮遺跡』高崎市教育委員会
- 田口一郎 1981 『元島名將軍塚古墳』高崎市教育委員会
- 田口一郎 1998 「新たな土器が成り立つとき」『人が動く・土器も動く』
- 田口一郎 2000 「北関東西部におけるS字口縁甕の波及と定着」『S字甕を考える』第7回東海考古学フォーラム三重大会実行委員会
- 田中良之 1986 「縄文土器と弥生土器1 西日本」『弥生文化の研究3』雄山閣
- 田中良之 1991 「いわゆる渡来説の再検討」『日本における初期弥生文化の成立』横山浩一先生退官記念論II 文献出版
- 都出比呂志 1989 『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
- 都出比呂志 1993 「前方後円墳体制と民族形成」『待兼山論叢』第7号 史学編
- 都出比呂志 1996 「国家形成の諸段階」『歴史評論』551号
- 常木 晃 1999 『食料生産社会の考古学』朝倉書店
- 徳江秀夫 1985 『荒砥二之堰遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 都丸 肇 1985 『見立溜井遺跡』赤城村教育委員会
- 友廣哲也 1984 「有馬遺跡礫床墓」『研究紀要1』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 友廣哲也 1988 「古式土師器出現期の様相と浅間山C軽石」『群馬の考古学』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 友廣哲也 1991 「群馬県における古墳時代前期の土器様相」『群馬考古学手帳2』群馬土器観会
- 友廣哲也 1992 「群馬県の古墳時代前期の土器様相」『古代』94号 早稲田大学考古学会
- 友廣哲也 1994 「北関東の古墳時代文化の受容」『古代』98号 早稲田大学考古学会
- 友廣哲也 1995 「上野の古墳時代文化の受容」『古代探叢Ⅳ』滝口宏先生追悼論文集 早稲田大学考古学会
- 友廣哲也 1995 「櫛描文文化圏の弥生時代終末から古墳時代初頭期の墓制」『古代』100号 早稲田大学考古学会
- 友廣哲也 1996 「群馬県の北陸土器と古墳時代集落の展開」『古代』102号 早稲田大学考古学会
- 友廣哲也 1997 「石田川式土器考」『古代』104号 早稲田大学考古学会
- 友廣哲也 2003 「古墳社会の成立—北関東の弥生・古墳時代の地域間交流—」『日本考古学』16号 日本考古学協会
- 友廣哲也 2004 「北関東古墳時代前期土師器の様相から見た古墳時代社会の成立」『古代』112号 早稲田大学考古学会
- 中尾佐助 1990 『分類の発想』朝日選書
- 橋本博文 1994 「関東北部における古墳出現期の様相」『東日本の古墳の出現』山川出版社
- 長谷川福次 1996 「北町・田ノ保遺跡」北橋村教育委員会
- 比田井克仁 1997 「定型化古墳出現前における濃尾、畿内と関東の確執」『考古学研究』第44巻第2号
- 比田井克仁 2001 「関東弥生首長の相対的位置づけとその成立過程」『古代』109号
- 比田井克仁 1987 「南関東出土の北陸系土器について」『古代』83号
- 広瀬和雄 2003 『前方後円墳国家』角川選書
- 広瀬和雄 2003 『日本考古学の通説を疑う』洋泉社
- 深澤敦仁 1998 「上野における土器の交流と画期」『庄内式土器研究XVI』
- 福嶋正史 2000 『中溝・深町遺跡』新田町教育委員会
- 藤田弘夫 1991 『都市と権力』創文社
- 藤田弘夫 1993 『都市の論理』中央公論社
- 藤巻幸男 1985 『荒砥前原遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 藤巻幸男 1993 『五目牛清水田中田遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 北条芳隆・溝口孝司・村上恭通 2000 「古墳時代像を見直す」青木書店
- 前原 豊 1982 『堀ノ内遺跡』藤岡市教育委員会
- 前原 豊 1985 『柳久保遺跡』前橋市教育委員会
- 前原 豊 1996 『内堀遺跡』前橋市教育委員会
- 松村一昭 1978 『赤堀村鹿島遺跡』赤堀村教育委員会
- 松本直子 2000 『認知考古学の理論と実践的研究』勉九州大学出版会
- 松島栄治 1968 『石田川』石田川刊行会
- 三浦茂三郎 1996 「下境Ⅰ・Ⅱ遺跡」群馬県教育委員会
- 水田 稔・石北直樹 1985 『石墨遺跡』沼田市教育委員会
- 森岡秀人 1993 「土器移動の諸類型とその意味」『転機』4号
- 山浦 清 2000 「縄縄文から察文文化成立期にかけての北海道・本州の交流 その交易システムの展開」73—89頁『交流の考古学』小川英文編 朝倉書店
- 山田昌久 1986 「くわとすきの来た道」『新保遺跡Ⅰ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 若狭 徹 1990 「井野川流域を中心とした弥生時代後期遺跡群の動態」『群馬文化』220
- 若狭 徹 1990 『保渡田遺跡Ⅶ』群馬町教育委員会
- 若狭 徹 1991 「群馬県における弥生土器の崩壊過程」『群馬考古学手帳』1 群馬土器観会
- 若狭 徹 1992 「北西関東における弥生土器の成立と展開」『駿台史学』第84号
- 若狭 徹 1996 「群馬県地域」『YAY! (やいっ!) 弥生土器を語る会20回到達記念論集』弥生土器を語る会
- 若狭 徹 1998 「群馬の弥生土器が終わるとき」『人が動く・土器も動く』
- 若狭 徹 2000 「S字状口縁甕波及期の様式変革と集団動態」『S字甕を考える』第7回東海フォーラム三重大会事務局
- 若狭 徹 2002 「古墳時代の地域経営」『考古学研究』第49巻第2号 考古学研究会
- 渡辺 仁 1985 『人はなぜ立ちあがったか』東京大学出版会